

とにし

日蓮大聖人御真筆写

発行所

日蓮正宗法華講妙縁寺支部
〒130-0001
東京都墨田区吾妻橋 2-2-10
TEL 03(3622)5086
FAX 03(3829)2766

第367号

光久御住職御書講義

妙密上人御消息

諸宗の元祖等法華經を読み奉れば、各々其の弟子等は我が師は法華經の心を得給へりと思へり。然れども詮を論ずれば、慈恩大師は深密經・唯識論を師として法華經をよみ、嘉祥(かじょう)大師は般若經・中論を師として法華經をよむ。杜順(とじゅん)・法蔵等は華嚴經・十住毘婆沙論を師として法華經をよみ、善無畏・金剛智・不空等は日蓮を師として法華經をよむ。此等の人々は各法華經をよめりと思へども、未だ一句一偈もよめる人にはあらず。詮を論ずれば、伝教大師ことわりて云はく、「法華經を讀むと雖も還つて法華の心を死(ころ)す」云々。例せば外道は仏經をよめども外道と同じ。

(御書 九六七頁)

《通釈》

諸宗の祖たちは法華經を見て意味を解かれれば、各々の弟子たちは我が師が法華經の真意を得られたと思つてゐる。しかし詳しく論ずれば、玄奘三蔵の弟子・慈恩大師は深密經・唯識論を師として法華經を講じ、隋の頃に三論宗を再興した嘉祥大師は般若經・中論を師として法華經を解した。また華嚴宗の祖・杜順やその三祖・法蔵たちは華嚴經・十住毘婆沙論を師として法華經を解き、真言密教の僧である善無畏・金剛智・不空たちは日蓮を師として法華經を解いてきた。これらの人々はそれぞれ法華經に通達した者たちであると思われているがしかし、まだ法華經の一句一偈たりとも全く理解してゐないのである。これを委細に論じれば、伝教大師は『法華秀句』で道理を示され「法華經を讀むと雖も還つて法華の心を死す」と表した。例えば外道の者は仏經を讀むことができるが、しかし、外道の命が含まれているので、結局は仏經を破壊する道理と同じである。



解説

本抄は鎌倉の企ヶ谷(くわがやつ)の妙密上人からの青鳧(せいふ)五貫文の御供養に対し、建治二(一二七六)年間(うるう)三月五日、身延の地より御年五十五歳の大人様が謝礼のために、その夫妻に与えられた書であります。

妙密上人は、鎌倉に居住していた在家僧、あるいは御家人と考えられていますが、詳細は不明です。ただし本抄の中に、「便宜(びんぎ)ごとの青鳧(せいふ)五連の御志は」(同九六九頁)との記述があることから、事あるごとに大人様に御供養を欠かさなかつた強信者であつたことがうかがえます。なお、本抄の御真蹟は現存しません。

本抄はおおよそ六つの点が挙げられますが、今回の箇所はその中の一つに、伝教大師の言葉借りて「法華經を讀むと雖も還つて法華の心を死す」とあります。つまり、法華經の信仰者とならずして、法華經を讀む意義はないと厳しく誠められております。

法華經は、唯一完全な真理を説いた絶対の教えであるゆえに、「若し人信ぜずして、此の經を毀謗(きぼう)せば(中略)其の人命終(みょうじゆう)して(中略)阿鼻獄(あびごく)に入らん」(法華經一七五(六)頁)と、帰依しない者の墮地獄を説き、傍觀者の存在を許しません。ゆえに法華經に帰依せずして經文を解釈することは、すでに法華經の意に背反

し、他の人々をも、成仏の直道から遠ざける行為になるのです。

この「法華經を讀むと雖も還つて法華の心を死す」について、私たちの信心も「大人様の御心を死す」という振舞いをしていないか、常に心に置いておかねばなりません。外から真面目で一所懸命に、強盛な信心に見えても、世間一般常識や法律から外れているような行いがあれば、それは我見であります。自分の勝手な思い込みや先入観を中心に置いた唱題であつては、日蓮正宗の教えを破壊することになります。日蓮大人様・日興上人・日目上人と代々の御法主上人に連綿と伝わる唯授一人の血脈のもとで、七百有余年の間に築かれた歴史と伝統の中に身を置くことは、自己中心的な我見の信心から脱却する修行でもあります。その功德として、円満な境涯が具わるのです。「大人様の御心を死す」ことのない信心に励みましよう。

最後に大人様は『土籠御書』に、「法華經を余人のよ(読)み候は、口ばかりことば(言)ばかりはよ(読)めども心はよ(読)まず、心はよ(読)めども身によ(読)まず、色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ」(御書四八三頁)と仰せです。私たち弟子檀那にも、法華經の教えを、身をもつて讀むことの尊さを示され、そこに勝れた信仰体験があることを御指南されております。

(文責・編集部)